

広島大学マスタースズ主催市民フォーラム：

学園都市・東広島の近未来を語ろう（第6回）

シンポジウム「子どもを健やかに育むことのできる東広島市に」

報告

広大マスタースズ会員 上 真一

2024年1月28日（日）、東広島市市民文化センター アザレアホールにおいて、標記フォーラムが開催された。今回は「学園都市・東広島の近未来を語ろう」の第6回目となり、「子供を健やかに育むことのできる東広島市に」のテーマを掲げてシンポジウム形式で行われた。当日の参加者数は約50名、その約8割が女性であった。また臨時託児所を開設して子どもの受け入れ体制も整えた。

現在の急激な少子高齢化は日本の将来に暗い影を落とす一因となっていると言われている。それに対応するために、子育て支援を中心とする様々な少子化対策が講じられているが、出生率の回復につながる効果には結びついていない。そこで、本シンポジウムでは、東広島市における子育て問題について話し合い、この地で子どもを健やかに育むための方策などについて議論した。



まず、山崎博敏 広島大学名誉教授が「少子化と子育て問題の現状と背景」に関して概説した。日本の人口動態、出生率、その他の統計データに基づき、少子化の要因として、1）結婚年齢・出産年齢の上昇、2）夫婦当たりの出産数の減少、3）未婚者の増加、4）保護者の経済状況の悪化、5）新型コロナによる出産数の激減などを指摘した。

次に、川口一成 東広島市副市長により「東広島市の子育て政策、主として乳幼児を対象として」と題する発表があった。地理的条件や人口動態が類似している国内15地方自治体の中では、東広島市の子育て関連予算は総額でも市民一人当たりの額でもトップで、子育ては市の重要政策の一つとして充実に努めている現状が説明された。

続いて、奥先楓 社会法人紅楓福祉会理事長により「放課後児童クラブ運営者として」の立場から話題提供があり、当該法人施設が建設されるに至った経緯や、施設内で嬉々として活動する子どもたちの日常が紹介された。またこのような施設の運営を通して地元社会に貢献できる喜びを語られた。

最後に、2児の母である東間真緒さんは、「子育てするなら東広島」の謳い文句を掲げていた東広島市に移住し、実際の子育てを通して当市の施策が充実していることを知り、高く評価しているとのことであった。ただ、現在、長女が通う放課後児童クラブにはスペースや活動の制約などの問題点があり、市は学校側とも協議しながら改善を図ってほしい旨の要望が表明された。

総合討論において、東広島市民として子育て中の鈴木直美 中国新聞記者がファシリテーターを務め、4人の講演者間の論点のすり合わせや、会場参加者からの意見も促しながら活発に議論をリードした。他の地方自治体（例えば明石市など）で行われている先進的な子育て政策を列挙し、東広島市での実施の可能性などについて問うと、副市長から可能な政策から実施して行きたいとの発言があった。東広島市が名実ともに子育て政策の充実した学園都市になることを期待するものである。

報告者：上 真一（総合司会）